

Title	超級学習者による博士論文の初稿に見られる「わかりにくさ」について
Author(s)	ミグリアーチ, 慶子
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 8 p65-p.75
Issue Date	2010-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12002
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

超級学習者による博士論文の初稿に見られる「わかりにくさ」について

ミグリアーチ慶子

【要約】

超級学習者であっても論文やレポートはわかりにくいことが多い。その「わかりにくさ」は博士論文のレベルになっても依然として存在するが、その要因についてはあまり解明がすすんでいない。本調査は調査協力者の博士論文の初稿原稿を分析し、わかりにくいと感じた部分を類型化することで「わかりにくさ」の要因を取り出す試みである。その結果「わかりにくさ」の要因として、①不明瞭な引用、②重複、③不適切な対比と並列、④接続的表現の不正確な使用、⑤論理関係の破綻、⑥長すぎる文、⑦不適切な句読点の使用、⑧不必要な説明、⑨論理の軸の選択の誤り、を取り出すことができた。

1. はじめに

すでに日本語の運用については教養ある母語話者と同程度であるとされるいわゆる超級学習者で、授業参加、文献講読、論文執筆など日本人学生と全く同じ課題をこなしているように見えても、論文やレポートを書くときとわかりにくいことが多い。その「わかりにくさ」とは、語彙や単文レベルの文法の間違いなどによるものではない。例えば、一つ一つの文を読むとそれ自体は意味的に完結しているが、まとまった分量を読んでも結局何が言いたいのかよくわからなくなってしまうというタイプの「わかりにくさ」である。その「わかりにくさ」は博士論文のレベルになっても依然として存在するが、その要因についてはあまり解明がすすんでいない。その理由には以下の点が考えられる。

理由①博士論文の指導は当然研究の内容に重点がおかれるため、内容が理解できないほどではない日本語の「わかりにくさ」については取り立てて指導されない

理由②文章をわかりにくくしているのは、書かれている内容についての書き手、読み手双方の理解の程度など日本語の運用能力以外の要因の関与が考えられ、明確な線引きがしにくい

理由③個人の癖や文章の上手下手に還元されていく部分が多い

理由④調査を行うにもサンプル数が著しく少ない

本稿では、個人差の問題が大きく一般化はできないことを承知の上で、調査協力者の博士論文の初稿原稿を分析し、試験的に「わかりにくさ」の要因を取り出してみたい。

2. 調査の概要

筆者は2006年12月に博士論文を提出した留学生Oさんの初稿の一部を校正する機会を得た。この調査はその際に入手した原稿を、Oさん、指導教員双方の了承を得て分析したものである。原稿が執筆されたのは2006年8月～9月である。

2.1 調査協力者

Oさんはモンゴル出身で、2000年来日、大学院研究生（2年間）を経て博士前期課程（2年間）を修了し、2006年当時博士後期課程の3年次に在籍していた。専門は日本語教育で、日本語レベルは4技能とも教養ある母語話者と比べて遜色ない。

2.2 調査の方法

入手した原稿（A4用紙24枚）の中でわかりにくいと感じた部分、つまり、わからないわけではないが読むのに必要以上の負荷がかかると思われる部分を取りだし、大まかに類型化した。今回は主に、文や段落の構成の仕方や、論の組み立てに関するところを中心に取り上げた。そのため、以下の点については考察の対象としていない。「明らかなミス」の基準は同じ間違いが繰り返されていないこととした。

考察対象外項目①明らかな変換ミスや表記上の誤り

例：「支持関係」（指示関係）、「票」（表）、「高い」（高い）

考察対象外項目②明らかなミスによると思われる助詞や活用の誤り

例：「求めるたり」（求めたり）、「ソのも「アと同じく…」（「ソ」も「ア」と同じく…）」

考察対象外項目③不適切な語彙選択

a) より適切な表現や、慣例的に使われる言葉があるにもかかわらず、それが使用されていないことで違和感を引き起こしているもの

b) 口語的な表現

例：「使い分けについてまだ制約が掴まえていない」「本来の指示対立では対応が間に合わなくなり…」「どうなるかを次の図2でみてみよう。」「この指示対象と聞き手との三つの関わり方でみる。」

c) 不適切な語彙結合

例：「日本モンゴル語」（日本語とモンゴル語）、「次の3特徴」（次の3つの特徴）、「聞き手にとって未知と判断上、提示したもの」（「聞き手にとっては未知であると話し手が判断した上で提示したもの」）

考察対象外項目④翻訳文中の不自然さ

例文などで、原文に忠実に逐語訳したため、意図的に日本語の自然さが犠牲になっている部分など

考察対象外項目⑤論文の体裁に関すること

スペーシング、インデント、フォント、括弧の使い方など

考察対象外項目⑥論文執筆における作法

用語は定義してから使う、用語は統一する、見出しには段落番号を付ける、など

なお、語彙については上記項目③にあげた問題のほか、その語彙が「その語」そのものを指してメタ言語的な使い方をしているのか、「その語の指している具体的な何か」なのかが問題になる、以下のようなケースもあることも指摘しておく。

例：「なお本稿ではモンゴル語の指示代名詞をモンゴル語の指示詞と称し使用する。」
(なお本稿では用語を「指示詞」に統一する、の意。)

3. 調査の結果

「わかりにくさ」の要因として、①不明瞭な引用、②重複、③不適切な対比と並列、④接続的表現の不正確な使用、⑤論理関係の破綻、⑥長すぎる文、⑦不適切な句読点の使用、⑧ unnecessary 説明、⑨論理の軸の選択の誤り、を取り出すことができた。以下それぞれの項目について例示し、説明を加える。なお、引用文はすべて原文のまま、下線は引用者が引いたものである。

3.1 不明瞭な引用

引用が適切になされないと、どの部分が筆者の展開する議論で、どの部分が他者の議論なのかがわからなくなり、批判的な読みを著しく困難にする。

次の例1-1は用例を提示したすぐ後の文章で、第一文目が問い、最後の文が答えになっている。中間部分はかなりの部分引用であるらしいが、そのはじまりが不明瞭であるため、筆者の説明がどこまでなのかわからなくなっている。

例1-1

なぜここでte-系指示詞のterが使われず、「nuguu」が登場するのだろうか。その理由は、モンゴル語の「あの／その＋人」にあたるterはte-系指示詞と同時に三人称代名詞でもあるからである。すなわち、モンゴル語の三人称代名詞 (ter) は日本語の三人称代名詞「彼／彼女」と同じく、原則として対話の始まる前に既に自分の知識の中で確立している対象あるいは実際に体験的交渉を持った対象しか指すことができない (田窪 1996 : 73)。したがって、三人称でもあるterでは表すことができない。

また次の例1-2は、始まりは明快なのだが、途中「～と定義している。続けて～」以降、どこで再び引用に戻ったのか不明である。

例1-2

モンゴル語の指示詞についてШагдарсүрэн (1999) の定義を引用すると、次の通りになる。「モンゴル語の指示詞は事物、現象とその性質、様態、象徴、体系、数、空間、時間などの多数のかかわりを話し手から近いか遠いかというはかり方で指示することであると定義している。続けて、現代モンゴル語の指示詞またはその形態が多様のようなが、歴史的な起源からみると近称はe-語幹、遠称はte-語幹からなる。この他にもnügüü/mönööやtus, tuhainなどがある。(中略) 指示詞は三人称としても使われる。」

次の例1-3は「文脈指示用法」という小見出しのすぐあとの部分である。本来なら筆者自身による文が来るべきところであるが、初めから引用になっている。読み手は途中でそれが筆者の見解ではなく引用であることに気づき、慌てて筆者の注釈を探そうとするが、この後もこの定義について筆者は何も言及していない。

例 1 - 3

文脈指示とは相手または自分の表現内容にある素材をその対象として指示する用法であり、この用法は、知覚可能な素材のみを対象とする現場指示と違い、知覚の可否には無関係にいかなる素材も対象として指示しうるものであり（中略）対象とされる素材はこの語の前あるいは後に明示されるものである。（堀口 1987a : 152）

次の例 1 - 4 は引用部分そのものは明白なのだが、続いてなされている論考とその引用との関係が示されておらず、引用からどのような情報を引き出せばよいのか迷ってしまう。

例 1 - 4

世界中の479言語の指示体系を典型的に比較した吉田（1980）は、指示詞には1分型から14分型までであるが、うち2分型が47.4%と最も多く、次に3分型が35.1%を占めるとしている。

日本語は近称コと中称ソと遠称アと3項対立であるのに対し、モンゴル語は近称のe-と遠称のte-の2項対立である。モンゴル語で書かれた『モンゴル人のための日本語教科書初級－教師用指導マニュアル』には「コはe-に、ソ・アはte-に対応する」となっている。果たして2項対立のモンゴル語と3項対立の日本語の指示詞を対照させると、近称コはモンゴル語の近称e-に、日本語の遠称アはモンゴル語の遠称te-にそれぞれ対応しているのだろうか、あるいは、日本語の中称ソはモンゴル語のe-にかかわらないのだろうかといった疑問が出てくるのは当然である。

本章では日本語とモンゴル語の指示詞の使用規則（話し手と聞き手との対立的観点から）を対照比較することにより、現場指示用法と文脈指示用法における両者の異同を明らかにする。

3. 2 重複

同じことを示す言葉が不必要に重ねられていると文章が煩雑になる。一文程度なら特に問題ではないが、そのような箇所が多いと読み手の集中力をそぎ、結果として大切な情報が埋もれがちになる。

次の例 2 - 1 から 2 - 3 までは1度でいいことを2度述べている。例 2 - 4 は繰り返さなければならないことであるが、代名詞的表現（前者／後者など）の使用や、番号や記号の利用によって言葉による繰り返しを避けることができる例である。

例 2 - 1

モンゴル語の研究の中でモンゴル語の指示詞に関する先行研究が数少なく、ほとんどの論文が指示体系について触れる程度で論述されたものである。

例 2 - 2

現場指示用法は肉眼で可視できる物事を指示する用法である。

例 2 - 3

以上の対照比較から日本語とモンゴル語の指示詞を用法別に対応させて表にまとめると次の表(?)のとおりである。

例 2 - 4

文脈指示用法を「指示対象が聞き手の存在や知識が考慮される場合」と「聞き手の存在が考慮されない場合」という2グループに弁別して考察する。「指示対象が聞き手の存在や知識が考慮される場合」のグループには「体験提示用法」、「片方知識用法」、「共有知識用法」が入り、「聞き手の存在が考慮されない場合」のグループにはいわゆる「前方照応用法」がそれぞれ分配される。

3.3 不適切な対比と並列

対比は原則としてある共通のカテゴリーの中での差異を示すものである。しかし何が共通であって、何の違いを比較しようとしているのかが不明瞭であると、解釈が困難になり、読み手は情報を補足するためにその前後を再度読み返すなどの労力を課されることになる。並列も同様で、何が共通なのかが不明瞭な異種のもものが並べられていると解釈が困難になる。

次の例3-1は「ある何か」を、前半では「もの」後半では「対象」という異なった言葉で示している。読み手は言葉が違うと何か別のものをさしているのではないかと疑うため、一瞬の理解の遅れをもたらす。

例 3 - 1

「e-語幹は近いものを指示し、te-語幹は遠い対象を示す」

次の例3-2で言おうとしていることは、おそらく、「指示詞」に属する言葉の数が多く、それぞれの指示詞の派生形も多い、ということであろうと推測される。しかし実際に並列されているものが品詞である「指示詞」とその属性である「形態」であるため、比較のグラウンドとも言うべき「共通の何か」が何であるのかがわかりにくい。

例 3 - 2

指示詞またはその形態が多様ようだ

これまでの例はいずれも一文に収まるものであるため、比較的容易に解釈できる。しかし文単位、または段落単位でも同様のことが見られ、範囲が広がると当然読み手への負荷は増大する。また、対比や並列が使用されるべきところで適切に使用されていない場合にも、同様に負荷がかかる。

次の例3-3は、対比が効果的に使用されていればより明解に説明ができたであろうと考え

られる部分である。ここでOさんが言おうとしているのは、日本語で「対立型現場指示用法」と言われるものはモンゴル語では「指示詞」では表すことができないが、他の方法で（空間副詞という別の品詞を使えば）表現することができる、ということである。Oさんは「指示詞」も「空間副詞」も大きく「指示体系」に属するものとして議論を進めている。しかしこの文を読んで、モンゴル語の指示体系に日本語の「対立型現場指示用法」にあたる用法があるのかどうかについて明解な理解に達するのは難しい。つまり「モンゴル語の指示詞体系のみでは対応しきれない。」→「指示体系にない」と明言し、先行研究が皆無であることによってさらに強調しておきながら「指示する方法がない訳ではない。」に唐突に繋がるからである。結局「対立型現場指示用法」はモンゴル語にあるのかないのかわからなくなってしまう。

例 3 - 3 a

しかし、日本語の話し手と聞き手が対立する対立型現場指示用法に関してはモンゴル語の指示詞体系のみでは対応しきれない。聞き手の存在を配慮する用法が指示体系にないからである。先行研究全般においても聞き手とのかかわりについて管見では見当たらない。とはいえ、モンゴル語で話し手と聞き手とを対立させて指示する方法がない訳ではない。

この部分はその後次のように続く。

例 3 - 3 b

それでは、話し手の視点に聞き手の存在を取り入れた話し手と聞き手が対立する場合、どうなるかを次の図2でみてみよう。（筆者註：図2略）

ここでも同じく話し手の近く又は縄張りにあるものをe-系指示詞で指示し、話し手から離れたものをte-系指示詞で指示する。しかし、聞き手の近く又は縄張りにあるものを指示するとき、naa-系空間副詞を使用する。なぜなら聞き手の縄張りを表す指示体系がないため、「～の手前の、話し手側の」という含意のnaa-系空間副詞を使用することによって指示対象は「話し手からみたら聞き手の手前側にある」と指示が出来、ここでやっと「聞き手の存在」が引き立てられる。

この例 3 - 3 全体の冒頭部分は、対比を軸にした文構成にすると、かなりわかりやすい説明になるのではないと思われる。おおざっぱに言えば、「対立型現場指示用法」はモンゴル語の「指示詞」では表現できないが、「空間副詞」を使えば可能である、という構成にするのである。

3.4 接続的表現の不正確な使用

接続詞や副詞にはその後の文章の展開を示す役割がある。そのマーカーが間違っていて使われると、読み手は予測の修正を強いられ不必要な負荷がかかってしまう。

Oさんの場合は特に副詞「すなわち」の使い方に違和感があった。『現代副詞用法辞典』によると「すなわち」は「語と語または語句と語句をつなぐ用法で用いられる。（中略）前件と後件が同義であることを表すが、後件は前件より客観的で、よりわかりやすい内容になっていることが多い。」ということである。しかし次の例 4 - 1 と 4 - 2 は、用例を示した直後の解説部

分であり、「すなわち」が「以上の例より」という意味で使われている。前件がなく「すなわち」から文が始まるため、読み手は一瞬、以前に何か主張されていたのか、と読み落としを心配してしまう。また例4-3は、どの語句と語句が「すなわち」を介して結びついているのか、つまり何がどう言い換えられているのかが不明な例である。

例4-1

すなわち、上記の2例から話し手が聞き手の直前の発話を提示する場合、te-系指示詞が使われることが明らかである。そして聞き手の縄張りを強く表現するとき、二人称所属の副助詞を用いることがある。

例4-2

すなわち、先行詞がどんなものであろうが、前方を照応するときte-系と指示詞が用いられ、時にはe-系指示詞も使えることもある。この用法におけるe-系指示詞とte-系指示詞の使い分けについてまだ制約が揃っていないため、今後の課題に残す。

例4-3

現場指示用法は肉眼で可視できる物事を指示する用法である。前述したようにモンゴル語指示体系が話し手中心の視点を取り、話し手から指示対象までの距離で指示詞が決まるという距離遠近距離説の点で日本語の融合型現場指示用法に類似する。すなわち、融合型現場指示用法は話し手に近いものはe-系指示詞で、話し手から離れたものはte-系指示詞で指示する用法である。

また例4-4では、先行研究が乏しいことの例示に先だっているはずの「たとえば」の後に、現在のモンゴル語研究の基本的見解が述べられるに留まっている。文末を「「<引用>」と簡単にふれられているにすぎない」などにすればOさんの真意により近くなったかもしれない。

例4-4

モンゴル語の研究の中でモンゴル語の指示詞に関する先行研究が数少なく、ほとんどの論文が指示体系について触れる程度で論述されたものである。たとえば、モンゴル語研究ではモンゴル語の指示詞を指示代名詞と称し、「e-語幹は近いものを指示し、te-語幹は遠い対象を示す」という解説が基本的である。

3.5 論理関係の破綻

理由付けをする際にその根拠と結論の間が十分に説明されないと論理の飛躍を招く。次の例5-1では、言葉の表面だけをなぞると「指示詞には基本的な体系がある」しかし「基本的体系以外にも指示詞がある」しかし「基本的な体系以外の指示詞は詳細に説明されていない」だから「モンゴル語は2項対立の指示体系を持つ」という展開になっている。端的に言うなら「説明されていないから、存在しない」という少々乱暴な展開である。ここでは「モンゴル語が2

項対立であると言われているのは、周辺形式がまだ十分に研究されていないからである」などの組み立てにすればOさんが言いたかったことにより近くなったかもしれない。

例5-1

まずe-系指示詞とte-指示詞の基本的な体系があるが、その他にも指示詞もある。しかし他の指示詞については指示詞としての詳述が少ないため、モンゴル語は2項対立の指示体系を持つとされている。

また次の例5-2は、「nuguu」とモンゴル語の三人称代名詞(ter)との使いわけを説明した部分である。ここで「nuguu」の使用条件として「母も娘も知っている「あの友達」／対話が始まる前から共通の知識内にある人物」であることが挙げられている。そして三人称代名詞(ter)の使用条件として「対話が始まる前に既に自分の知識の中で確立している対象あるいは実際に体験的交渉を持った対象」があげられ、その結果として両者は相容れないとされているが、その条件の違いがどこにあるのかは非常にわかりにくい。そしてさらに結文として「nuguu」は「話し手と聞き手の両者が既知である指示対象が人間の場合」に使用するとし、逆接の「しかし」の後、「対象が話し手と聞き手が知識を共有する場合のみに用いられる」と述べられているが、「しかし」の前件と後件の違いも非常にわかりにくい。結果としてこの段落全体を著しく理解困難なものにしている。

例5-2

しかし、次の例(?)では母も娘も知っている「あの友達」について「nuguu」という指示詞が用いられている。日本語では「例の人、あの人」のように訳することができる。この「nuguu」が指す対象は対話が始まる前から共通の知識内にある人物である。

例(?) Eej: ...chi Cheju ruu nuguu naiztaigaa yarisan u u ?

母: 君、チェジュのあの友人に電話したの?

Ohin: Uu, neeree tiim. Tuuntei uulzah ch hereg bii. Bi odoohon yariadahja.

娘: あっ、そうだった。彼／彼女／あの人(?) / あいつと会う用事もあるから、今すぐかけるわ。

(Shagdarsuren 1999: 152)

なぜここでte-系指示詞のterが使われず、「nuguu」が登場するのだろうか。その理由は、モンゴル語の「あの／その+人」にあたるterは te-系指示詞と同時に三人称代名詞でもあるからである。すなわち、モンゴル語の三人称代名詞(ter)は日本語の三人称代名詞「彼／彼女」と同じく、原則として対話が始まる前に既に自分の知識の中で確立している対象あるいは実際に体験的交渉を持った対象しか指すことができない(田窪1996: 73)。したがって、三人称でもあるterでは表すことができない。話し手と聞き手の両者が既知である指示対象が人間の場合、「nuguu (unuu/munuuh等の形態もある)」を使用する。しかし「nuguu」は「例の／あの」のように対象が話し手と聞き手が知識を共有する場合のみに用いられると思われる。

3.6 長すぎる文

一文にたくさんの情報をいれすぎると理解に負荷がかかる。次の例6-1には、「モンゴル語と日本語の指示詞を対照させること」「モンゴル語の指示代名詞を概観すること」「指示の対象物は目にみえるものも目にみえないものも両方扱うこと」「日本語の指示詞の枠組みに基づいて対照すること」「その枠組みとは指示対象の性質に依拠した分類であること」の5つの情報が提供されている。文をわけて一文あたりの情報量を減らすと、もう少し読みやすくなるであろう。

例6-1

なお、本稿ではモンゴル語と日本語の指示詞を対照させる際、モンゴル語の指示代名詞について概観にあたって可視対象にも不可視対象にも関して、日本語の指示詞の現場指示用法（ダイクシス）と文脈指示用法（照応用法）という指示対象の依存する条件による分け方に基づいて行う。

3.7 不適切な句読点の使用（文章の意味解釈に影響を与える場合に限り）

例7-1では「話し手の視点に聞き手の存在を取り入れた話し手」という解釈を排除するために、また例7-2では「日本語の話し手」という解釈を排除するために、それぞれ下線部分の後に読点「、」を付けると解釈はかなり楽になる。

例7-1

それでは、話し手の視点に聞き手の存在を取り入れた話し手と聞き手が対立する場合、どうなるかを次の図2でみてみよう。

例7-2

しかし、日本語の話し手と聞き手が対立する対立型現場指示用法に関してはモンゴル語の指示詞体系のみでは対応しきれない。

3.8 不必要な説明

3.2の重複の節でも述べたが、不必要な情報が多いと読み手の情報処理能力に無駄な負担をかけるだけでなく、大切な情報への注目度が相対的に下がってしまう。そのためそのような不必要な説明は出来るだけ排除したい。次の例8-1では誤答率の説明（下線部分）はその前の正答率の説明の完全な裏返しで、何も新しい情報を追加していない。ゆえに記述の必要性は認められない。また例8-2は「用法がない」のであれば当然研究もないと考えられるため、下線部分は必要ないであろう。

例8-1

正答率が最も高い用法は「片方の体験知識用法」で45.2%であり、続いて「体験提示用法」が38.8%、「前方照応用法」が37.7%、そして最も正答率が低かった用法は「共有体験知識」

の15.0%である。そしてその反対に誤答率の平均がもっとも高い用法は「共有体験知識用法」で85.0%であり、続いて「前方照応用法」が62.3%、「体験提示用法」が61.2%、そして「片方の体験知識用法」が54.8%である。(表3参照)

例8-2

しかし、日本語の話し手と聞き手に対立する対立型現場指示用法に関してはモンゴル語の指示詞体系のみでは対応しきれない。聞き手の存在を配慮する用法が指示体系にないからである。先行研究全般においても聞き手とのかかわりについて管見では見当たらない。とはいえ、モンゴル語で話し手と聞き手とを対立させて指示する方法がない訳ではない。

3.9 論理の軸の選択の誤り

例9-1はモンゴル語の「文脈指示用法」についてまとめた部分であるが、日本語の指示体系に基づいてモンゴル語の指示体系を整理しているにもかかわらず、どの項目もまず「te-系指示詞が使えるか、使えないか」に注目し、「te-系指示詞」を軸とした記述になっている。そのため読み手にとっては、せっかくのまとめであるのに、基本となる全体像の把握が難しくなっている。「te-系指示詞」のふるまいについて論じるにしても、まずは日本語の指示体系のそれぞれの用法にモンゴル語のどの言葉が対応しているのかを整理して提示し、基本となる枠組みを共有してからの方がより効果的であろう。

例9-1

聞き手の存在が考慮される場合、指示対象は聞き手が提示したものの「体験提示用法」(ソ系)、話し手と聞き手の片方が未知と想定した場合の「片方知識用法」(ソ系)の場合、te-系指示詞が用いられることができる。「体験提示用法」に限るが、聞き手の縄張りを強く表現するには、te-系指示詞単独では用いることができない。te-系指示詞と同時に再帰所属後尾(～aa^{x4}(あなた(聞き手)の)や二人称所属副助詞(chin')が必要となるからである。これに対して、話し手と聞き手が指示対象に関する知識を共有する「共有知識用法」の場合、e-系指示詞もte-系指示詞も使うことができない。ここではnuguu/munuu/unuu 指示詞しか用いることができない。

聞き手の存在が考慮されない場合、指示対象は文脈中の先行詞の「前方照応用法」ではte-系指示詞が用いられるが、そのほかにe-系指示詞も登場できる。

以上、1ケーススタディとして調査協力者の博士論文の初稿原稿を分析し、その「わかりにくさ」の要因として、①不明瞭な引用、②重複、③不適切な対比と並列、④接続的表現の不正確な使用、⑤論理関係の破綻、⑥長すぎる文、⑦不適切な句読点の使用、⑧ unnecessary 説明、⑨論理の軸の選択の誤り、を取り出した。

4. 今後の課題

今後も同様のケーススタディを続け、どの程度が個人差の問題で、どの程度が広く共通にみられる特徴なのかを明らかにしていきたい。博士論文を日本語で執筆するレベルにまで達した非母語話者は、もう日本語について指導されることはほとんどない。これまでなんとなく感覚で身につけることを要求されていた「わかりやすい文章」の基準を明示的に説明し、そこへ近づけていくための指導法の開発をめざしたい。

参考文献

- 浅井美恵子 (2002) 「日本語作文における文の構造の分析—日本語母語話者と中国語母語の上級日本語学習者の作文比較—」『日本語教育』115号 日本語教育学会
- 金 宥暻 (2006) 「日本語学習者が書く文章のわかりにくさについて—言語的側面と認知的側面からの原因分析—」『ポリグロシヤ』第12巻 立命館アジア太平洋言語教育センター
- 杉田くに子 (1994) 「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴」『日本語教育』84号 日本語教育学会
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』85号 日本語教育学会
- 樋口裕子 (1996) 「初級後半からの作文指導のために」『日本語教育』91号 日本語教育学会
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版

(ミグリアーチ けいこ 本センター非常勤講師)